

---

# 死に神のコイビト！

架引

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死に神のコイビト！

### 【Nコード】

N5008BA

### 【作者名】

架引

### 【あらすじ】

一見して何処にでもいる学生、静間倫人は実は中三の春に始業式直前に異世界へと召喚された過去を持つ元英雄。

頼まれた邪神討伐を果たして元の世界へ帰ってきてから一年後に、高校の入学式当日に討伐……もとい浄化した神様が押しかけてきたからさあ大変！

しかも訪問の理由が「私と番になって」と来た！ しかも事後承諾！？

突然の出来事に怒りをぶつけながらも、しかしもう引き返せない

と知ると仕方ないと割り切り、高校生活を謳歌することにしたのだが、入った部活「新聞部」がこれまたいかにも胡散臭い活動内容で……。

ちょっとホラーの要素を織り交ぜた、学園恋愛アクションストーリー、ここに誕生しました。

## 堕ちた神と戦った少年

始業式の朝。

俺はいつも通りに目を覚ました。はずだった。

でも、頭はなんだかさつきりとしなかった。

原因は多分だけど、夢を見たからだ。

かなり前に体験した、不思議で、貴重で、楽しくて、哀しくて、何処か腹立たしい、過去の夢。

異世界。

そんなもの、あるものか。

こんなものがあつたらどうだろう、そういった想像から出来た架空の存在でしかないだろう。

3年前までは、そう思っていた。

神。邪神。悪神。

そんな存在、勝手の良いときにだけ無意識に縋る、存在しているけど存在しないもの。

そういった、人間の心が作り出した、矛盾した存在だ。

2年前までは、そう思っていた。

八百万の神。キリスト教のイエス・キリスト。ギリシャ神話のゼウス。彼等の共通点は神であること。

神は絶対の不可侵である存在だ。そして、人知を越えた、説明のつかない存在でもある。故に存在していても、人からの干渉で簡単にその存在は変わるものではない。

一年前までは、そう思っていた。

でも、そんなものは、間違っていた。

その世界に生きてみて、心で理解したのではなく、体で。そう。身を以って、五感を以って感じるようになった。

3年前。

丁度、始業式兼入学式が終わり、ロングホームルームが終わり。そして、家に帰っているところだった。

その日、俺は予定通りに、中三の初日を終えるはずだった。

その日。俺は予定通りに、午前中、日も上りきっていない内に家に戻り、午後はTVゲームをやるうとしていた。

だが、現実には小説より奇妙なもので。

家に帰る途中。俺は、唐突に異世界へと足を運び入れた。

問題なく、歩いていたはずだった。

目の前は何の変哲もない道路が続いていた。歩こうと思えば何処へでも通じていて。日本国内、本州で有る限り、果てのない道路。

その無数の道路のうちの一本を歩いていたはずである。

なのに。どう間違ったのか。

俺は、気がついたら全く知らないところに迷い込んでいた。

何処までも続いているはずのアスファルトはなくなり、代わりに目に入ってきたのは石造りの床。

都会からすれば遙かにのどかなはずの地方の町並みは消え去り、代わりに目に入ってきたのは狭苦しさを漂わす開放感のない石造りの壁。

何処までも澄み渡った空はやはり消え去り、代わりに目に入ってきたのもやはり石造りの天井。

すべてが石だった。

そして、俺は断ることの出来ない依頼を、頼まれた。

見たこともなく獰猛な肉食獣がいた。

見るからに人相の悪い盗賊団がいた。

そいつらに殺されかけたことは幾度となくあった。

逆にそいつらを殺したことは同じくらいあった。

そして、一週間くらい経って、初めて俺は、異世界というものの存在を、認めた。

二年前。

それは、受けた依頼をこなすべく異世界で武者修業をしていたときの事だった。

それは、受けた依頼をこなすべく異世界に伝わる聖剣を探していたときの事だった。

いつでもトラブルというのは突然で。

その日、俺は昔から使っている練兵場に発生するという百鬼夜行をなくしてくれという依頼を遂行しているところだった。

百鬼夜行は夜起こるものだ。俺はそんな先入観が働いていた。

そしてそれは当たった。

現れたのは無数の霊達。

みんな、自らの死を受け止められずにこの世に留まった霊達。

けれど。

現れたのはそれだけではなかった。

沢山の霊の中に、いた。

俺が果たすべき役目。その役目の対象が、そこにいた。

彼女は狂気に顔を歪めていて。悍ましい、赤いオーラを発していた。

そして、俺と彼女は、初めての出会いを果たし、救いたいと思った。

その後、一年経った、今から一年前。

俺は、邪神との一騎打ちになった。

防戦一方になる中で、俺は彼女に、思いの丈を、叫んだ。

『おい！ お前、目を覚ませよ！ 一年前お前が起こしていた百鬼夜行。あの時見えた幻。あれがお前の本心なんだろうが！』

二年前に遭った百鬼夜行。

それを食い止める最中で見た幻があった。

それは、一人の少女が、ふとした好奇心から封印されていた、人の悪意で固められた魔剣を解封してしまい。

優しくかった少女の心を一瞬にして黒く染められてしまった、非常

に悲しい幻想だった。

《お願い……！ 私を、殺して……正気に戻して！ これ以上、無駄に殺したくない！》

それは、神様なんて、邪神何ていう存在とは程遠い、何の変哲もない少女の叫びだった。

そして、俺は察した。本当に邪なのはこの神なのではない。こんな純情な少女をここまで黒く染めてしまうほどの、人が持つどす黒い悪意の塊。それこそが本当に滅ぼすべきものだ、悟った。

そして、同時に。時に神をも歪めてしまうほどの悪意を持つ、人の心。誰もが持ち得るその恐ろしさを、垣間見た。

『目を覚ませ？ ふん！ 何よ。私はいつだって正気よ？』

彼女は俺の叫びに対して、そう返してきた。けど、それは黒く塗りつぶされた表層の意識だけだ。深い部分にある、本来の彼女。百鬼夜行が見せたその部分まほうしはそうは言っていなかった。そのことを俺は知っている！

だから俺は言い返せる！

『んなことあるかよ！ 心のそこで、ずっと思ってたんじゃないの？ 死ぬ必要のない人に死を与えまくって！ 未練があつて留まっている死霊達を無理やり使役して、百鬼夜行まで引き起こして！

お前はそれでいいのかよ！』

『訳のわからないことを言わないで。だいたい、いつつも人間は勝手じゃない！ 欲に溺れて人を殺したり！ 他の生き物を卑下して勝手にペットとした拳句、自分達の都合で捨てたり安楽死させたり！ もうそんなことをする生物を見るのなんてうんざり！ そんな自分勝手な生物、私が終焉を与えてやるわ！』

『確かに、そう言う人だっているかもしれない！ でも、それは早計だぞ！ 人にはいろんな面がある。中には、どんな生物にだって等しく接する人だっているはずだ！』

俺のその言葉を聞いた彼女は、眼を細めて、心底不機嫌そうな顔をして。鼻で笑った後で、

『それこそ早計じゃない。いいえ、そもそも何の根拠も無い、理想論にも見たない、ただの妄想だわ。そう言う人の心の底にだって、今私が言ったような行動理念があるに決まってる!』

『ああ! 確かに根拠なんてないさ! 人の心なんて詠むことは出来ない。表層では優しくとも、内面は極悪。そんな人だっているだろうさ。でも、それでも中には本当に優しい心の持ち主だっているはずだろう!』

『甘いわね』

『なんだと!?!』

『本当に甘いわ! そんな人がいたとして。じゃあ、そうゆう人が、どれくらいいると思う? それに、人が人であり続ける限り、必ず黒い部分は何処にだってある。ふとしたきっかけで、やっぱり自分勝手な心に染まってしまふものなのよ!』

それを聞いて、俺は、心の底から、キレた。

何処までも、人を否定する目の前の少女に。

そこまで純情な少女を落とした、人の悪意の塊に。

そして何より、偉いことを言っている俺自身も過去に、そうしたことがあったことに。

でも、それを誰にぶつけるべきなのかは、判断がつかなかった。

目の前の少女? 違う。

確かに目の前の少女自体は、醜悪な存在だ。容姿だけなら、絶世の美少女だけど。

自分自身に? 正確には正解でも間違いでもあると思った。

だって、目の前の少女が言っていたように、誰にも黒い心はある。でも、俺一人が死んだところで人全員の悪意がなくなるわけでも無い。それに、自分に怒りをぶつけたところで、いいように自己完結してしまふのがオチだ。この問題は、一人で抱えるものではない。

存在し得る限り全ての世界にいる、全ての人間に対して?

妥当な線だろうけど、そんなの不可能だ。

人は、誰しも黒い部分をもっているのに、それと向き合おうとは



しない。いつだって、眼を逸らしてしまう。

そんな理不尽な、で終わってしまい、満身に憂さを晴らせない。だから、そんなやり場のない怒りを、目の前の少女にぶつけた。

『ああそうかよ！ だったらお前の深層意識の願いどおり、殺してやるよ！ 今のお前に存在価値なんて認めて堪るか！ 一度消えてゼロからやり直しやがれ！』

怒りに任せたその一撃は、思いのほか早く、強く繰り出せた。

そして、目の前の、邪神と化した心優しい少女は、聖剣の効果で、浄化された。

神は死なない。人々の進行がある限り。

一時的に消えるだけで、死ぬことはない。

俺が、残心も兼ねて少女を見つめていると、消失が顔まで達し始めたところで、少女の口が動いた。『ありがとう』と。

そして、俺はやりきれない思いで、その場を立ち去り、その数週間後にその世界を救った英雄として祭られることになった。

けど。

俺は、決してこのことを忘れることはないと思う。

人の心は、時として神をも凌駕する。神とて絶対ではないのだ。

寧ろ、人の進行の仕方によってその性質が左右される場合が殆どなのだから、ある意味、神にとって一番の弱点は、人の思い名のだ、と言っことを。

………ずいぶんとまあ、懐かしい夢を見たものだ。

アレからこちらの世界に戻ってきて、早一年、か。

色々合ったものだ。主に、勉強面で。

二年間もこっちの世界を留守にしてたんだ。勉強がおろそかになっってしまうのも当然だ。

特に、高校の受験シーズンを次の年に控えた、二年の春休みに召喚されてしまったのだから、由々しき事態だった。

忘れかけていた授業内容を取り戻すのに、どれだけ時間が掛かったことか……。

ま、無事に志望校に入学できただけでもよしとしたけど。今思い返して見れば、俺にとってはかなりはた迷惑な出来事だったなあ、と後になって何度も思い返す派目になるとは、召喚された当初は思わなかった。

そこまで考えて、さて、と過去の思い出に浸るのをおしまいにした。

そして、俺は入学式に送れないように、今日初めて行く広告の制服に、着替え始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5008ba/>

---

死に神のコイビット！

2012年1月14日13時54分発行